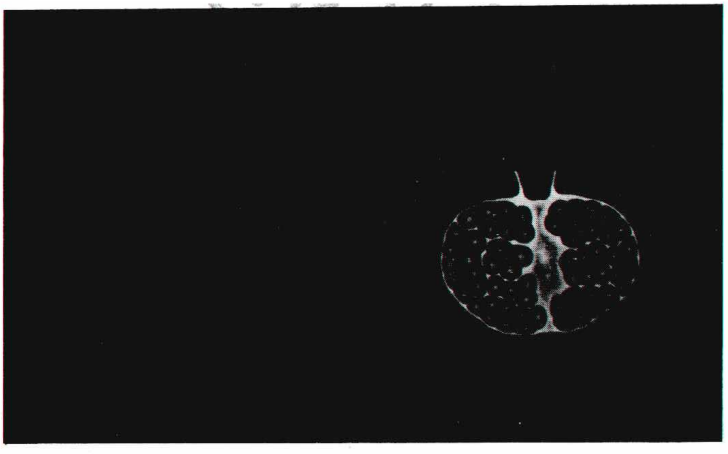
瀬戸内晴美

見出される時

創樹社

戸内晴美

見出される時



創樹社

見出される時　　0095—0045—4249

1975年3月3日　第2刷発行

著　　者　**瀬戸内晴美**
発 行 者　竹内　達
発 行 所　株式会社　創樹社
　　電話　東京 815・3331(代)　振替東京・154580
　　東京都文京区湯島2・2・1　〒113
本文印刷　株式会社　啓文堂
製　　本　美行製本
装　　画　浜口陽三
装　　本　道吉　剛

1975 © Harumi Setouchi　乱丁・落丁本はお取替えします。

目次

I

見出される時　11
逢うということ　18
忘れるということ　21
背中の顔　24
過ぎたるは　31
死にざま　32
日本人の歳末感　41
私のアンナ・カレーニナ　51
「妻の座なき妻」との訣別　54
東京の空の下　72
陽気な職人　75
江戸・東京の住み好さ住み難さ　79
作家の日記　90

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日記 92
蔵の中 95
酩酊に似た幸福感 99
見えるもの 101

II

東京を捨てて京都に移るの記 107
最後のもの 120
烈しい生と美しい死を 124
このいとしきもの——わが蔵書 128
「蒼馬を見たり」——詩と私 130
わが師わが友 133
「文学者」と私 135
秋のぐち 137

人間の幸福とは何か 140
「歩くこと」への憧れ 147
日記の迷い 149
徳島の人形廻し 151
黒髪と藤の花 153
残された夢 156
放浪について 160
エメラルドと川端夫妻 165
合歓 173
私の北京 175
幻の女たち 180
古里の黄昏 184

Ⅲ

風の声、鐘の声 191
ホテルとわたし 192
物心ついた時から 196
家と蒸発欲望 202
みどりの腰巻 205
五秒前の呻き 208
〝書き死〟の覚悟 210
酒に交われば 213
修羅八荒 220
私の過去帳 223
北京は変っていた 226
幻ならず——北京再訪 230
道元と私 242

昏き闇より——わが回心の記 249
中尊寺へ 270
その前後 282
人間家族を捨てるまで 291
遮断機への道 302
鶯の宿から 304

瀬戸内晴美

見出される時——文学的自叙伝

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I

見出される時

無意識に生きていて、ふと気づくと、「時」の不思議さとおそろしさにうたれて、慄然とすることがある。

年々歳々、自分の生活の時が小きざみに忙しくなり、それにつれて、「時」とじっくり顔をつきあわせて語りあうという時間がなくなっているのに気づく。

深夜ふと、仕事の手をとめ、疲れきった頭で、ぼんやりする時、急に自分のすぎて来た「時」の長さと、同時に短さが身にせまって、いてもたってもいられないような焦躁に見舞われる。

プルーストの小説に『失われた時を求めて』という傑作がある。同時に、そのプルーストの人と作品について研究したアンドレ・モロアの作品の題は、『見出された時』というのである。

生きていくということは、じぶんの失われた時への追憶であり、見出された時の確認であるのかもしれない。「時」ほど私たちと始終いっしょにいるものはない。人が生まれて死ぬまで、いや死んで後までも、時は「その人」と共に、まだ、人々の思い出の中に生きつづけ、その人の残

した仕事や、あるいは罪や、スキャンダルと共に生きつづける。
肉親よりも、夫婦よりも、空気や太陽よりも、人は自分の時と永遠につきあわねばならない。それでいて、いったい人は、何度、自分の時と、まともに顔をつきあわせ、対話し、なぐさめあい、あるいは叱りあうことがあるだろうか。
人が時の存在を思いだし、時の顔をしみじみ見つめる時は、幸福な時だろうか、不幸な時だろうか。
時をふりかえるということは、よほど幸福な時か、さもなければ、本当に孤独に打ちひしがれた時であるようだ。
私は年々に、一日の時間が短く、一年が早く、そして一時間の長さが縮まっていくような気がしてならない。
子どもの時の、あの無限に長かった一日を思いだすと、このごろの一日の短さは信じられないほどだ。
忙しいのは何よりですという社交辞令がある。
忙しさは、その人間が社会的に有能だとみとめられていることの証明だとされている。けれども忙しい時に恵まれ、仕事に追われ、この世に時を得ていると思われる時、人はたいてい自分の時を見失っていることが多いのではないだろうか。
私はここ、四、五年、明治生まれの女の人の生涯を追いもとめる仕事に主力をそそいできた。

すると一番面白い現象は、私の生が、現実の私のすごしている時と同時に、作品の中の彼女たちの持った過去の時も私の中によみがえってくることであった。

私はスプートニクの飛ぶのを現実に肌身に感じながら、同時に、ガス燈や、人力車やびんつけ油の匂いの過去の時の中にも生きているのである。そして時には、この過去の、見出した他人の時の方が、現実に空気を吸っている私自身の現在の時よりも、はるかに密度が濃く、はるかになまなましく、より切実な時間として、私に感じられてくるのである。

よく、あらゆる傷痕も時が癒してくれるということばがある。傷に血がふき、かさぶたがはり、やがてそれもぽろりと落ちたあとには、白い傷あとが皮膚にほのかに残る。しかしそれもまた、時がたつにつれ、薄れ、ある朝、気づいた時には、それは膚の他の場所と同じ色にまぎれてしまっていて、跡もとどめない。

とうてい生きていられないと思うような心の傷も、肉体にうけるこういう傷の治り方と同じように、いつのまにか時に癒されているもののようだ。

私くらいの年齢になると、一番時の生きていることを感じさせられるのは、人の子どもの成長に気づく時である。

赤ん坊が生まれ、育っていくことほど、時のいのちをまざまざと感じさせられることはない。

しばらく逢わないで逢った友だちの顔の上に時の足あとをみつけておどろくのも、人間が四十年も生きてくれば当然のことだけれど、女の年のとり方、容貌や肉体の老け方には個人差がはな

はだしい。
おしゃれとか、無頓着によるものではなく、その人の境遇が年齢の皺を一番はっきり刻みつける。
働いている女、自分の仕事を持っている女は、生まれつきの、美醜にかかわりなく、年をあんまりとらないものだ。
むしろ、何年ぶりかであって、あきらかに皮膚などは衰えているのに、何年前かよりもはるかに生き生きと、若々しくなっている女もある。
恋もまた年齢と時を忘れさせる。
激しい恋のすぎたあとには、急激に忘れていた時間が、どっとおしよせてきて、一夜にいくつも年をとったような気分にさせられてしまうものだ。
私の友だちの子どもたちは、早い人は大学生、おそい人はまだ幼稚園の子を持っている。
丁度青春を戦争中にすごしたため、結婚の時期も大幅にまちまちだったせいである。
ついこの間、友だちのかわいい坊やが、私の下宿していた家に遊びに来て柿の木に上り実をもぎおとして大喜びしたと思っていたのに、この間逢うと、もう私よりはるかに大きい大学生になっていて、
私をみおろし、
「小っちゃいんだなあ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com